

茨木市立安威小学校 全国学力・学習状況調査分析結果

令和4年10月作成

【今年度の結果と取組みについて】

〇●国語●〇

(領域ごと)

- | | |
|------------------|---------------|
| ①言葉の特徴や使い方に関する事項 | やや課題が残る結果であった |
| ②我が国の言語文化に関する事項 | 課題が残る結果であった |
| ③A話すこと・聞くこと | 概ね良好な結果であった |
| ④B書くこと | 概ね良好な結果であった |
| ⑤C読むこと | 概ね良好な結果であった |

(問題形式)

- | | |
|------|-------------|
| ①選択式 | 概ね良好な結果であった |
| ②短答式 | 課題が残る結果であった |
| ③記述式 | 概ね良好な結果であった |

(無解答率)

概ね良好な結果であった

(その他)

もっとも正答率が低かった設問は「記述式」の問題であったが、全国平均とは大差はなく、「記述式」問題全般において概ね良好な結果であった。

もっとも無解答率の高かった設問は「送り仮名」をとまなう漢字問題であった。

分析

前回、前々回の調査よりも、正答率、無解答率ともに大きく改善されていた。しかし、全国平均と比べると、正答率が下回り、無解答率が上回っている項目がある。特に、内容が「言語文化」に関するもの、形式が「短答式」に属するものについては全国平均との差が大きく、課題が残る結果であった。詳細は以下の通りである。

○「記述式」に類する問題として、「立場を明らかにして、自分の考えを述べる」問題は、良好な結果であった。その他の「記述式」に類する問題においても、概ね良好な結果であった。

○「読むこと」に類する問題として、「物語の全体像と関わらせながら表現の効果を考える」問題は、良好な結果であった。その他の「読むこと」に類する問題においても、概ね良好な結果であった。

▲「言語文化」に類する問題として、「手紙の清書」に関する問題は、「行の中心に文字の中心をそろえて書いていることを捉える」という点において、課題が残る結果であった。

▲「短答式」に類する問題として、「漢字を文の中で正しく使う」問題は、「録画・反省・親しむ」について、課題が残る結果であった。

▲「話す・聞く」に類する問題として、「必要なことを質問して、聞きたいことの内容を捉える」問題は、「正しい理由を選択する」という点において、課題が残る結果であった。

〇●算数●〇

(領域ごと)

- | | |
|----------|---------------|
| ①A数と計算 | 概ね良好な結果であった |
| ②B図形 | 概ね良好な結果であった |
| ③C変化と関係 | やや課題が残る結果であった |
| ④Dデータの活用 | 概ね良好な結果であった |

(問題形式)

- | | |
|------|-------------|
| ①選択式 | 概ね良好な結果であった |
| ②短答式 | 概ね良好な結果であった |
| ③記述式 | 概ね良好な結果であった |

(無解答率)

概ね良好な結果であった

(その他)

無解答率が前回よりも低く、短答式や記述式問題にも積極的に取り組んだことがわかる。

一方で C 変化と関係領域の問題に関しては、全国比との差が大きく、やや課題の残る結果となった。

分析

前回の調査よりも正答率の上昇している。しかし、正答率を全国平均と比べると、やや下回る結果となった。特に「数と計算領域」と「変化と関係領域」については全国比との差が大きく、やや課題の残る結果となった。

「数と計算領域」については、計算問題や記述式問題の正答率に大きな課題はみられなかったものの、数の処理の仕方を考察する問題に多くの児童が誤答した。示された場面において、数を大きく見立てたり、小さく見立てたりする問題に課題があることがわかる。また日常的に数を見立てるという活動が十分でないことが原因であると考えられる。

「変化と関係領域」では、割合を求める問題に関しては多くの児童が正答しているが、二つの数量を割合を用いて比べる問題に多くの児童が誤答している。数量が変化すると割合も変化すると考えている児童が多くいることがいえる。また、割合における「1倍」への理解が至っておらず、テープ図や問題場面を理解できていないことがわかる。

(領域ごと)

①エネルギー	やや課題が残る結果であった
②粒子	やや課題が残る結果であった
③生命	やや課題が残る結果であった
④地球	やや課題が残る結果であった

(問題形式)

①選択式	やや課題が残る結果であった
②短答式	概ね良好な結果であった
③記述式	課題が残る結果であった

(無解答率)

概ね良好な結果であった

(その他)

もっとも正答率が高かったのは、選択式の「見いだされた問題を基に、観察の記録が誰のものであるかを選ぶ」設問であった。

一方、選択式の「光の性質を基に、鏡を操作して、指定した的に反射させた日光を当てることができる人を選ぶ」および記述式の「問題に対するまとめから、その根拠を実験の結果を基にして書く」設問でもっとも正答率が低い結果となった。

分析

正答率について、全領域においてやや課題が残る結果であった。一方で、無解答率は全問題で全国の数値以下となっている。

問題形式別では、記述式で正答率が低くなっている。概ね題意をつかみ解答しているものの、根拠や理由となる記述が十分でない解答や、求められている条件を満たしていない解答が目立った。

㊦ (4)「水が入っている色の違う数個の缶に日光を当てた場合、その水温の変化について問題文に書かれているようなまとめになったわけを書く」問題では示された「【結果】を使って」解答することが求められていた。その中で、解答類型から誤答傾向をみると、多くの児童が水温の上昇と缶の色の関係に気づいたものの、問題文中の具体的な数値に言及していない、あるいは結果を用いず原因を示す内容で記述している等で誤答となっており、正答率の低さにつながっている。

一方で、㊦(1)「メスシリンダーの名前を書く」等の短答式の問題では比較的高い正答率となっており、全国平均を上まわっている。

○●経年比較●○

全体的な傾向についての分析

どの教科も無解答率が下がり、最後まで粘り強く取り組むことができたことがわかる。

今年度は国語も算数ともに正答率の上昇傾向はみられたが、全国平均を上回ることができなかった。

学力高位層と学力低位層、エンパワー層についての分析

国語に関しては、学力高位層の増加がみられ、前年度の調査を上回る結果となった。算数に関しても、学力低位層の減少が見られ、前年度の調査を上回る結果となったが、今年度も全国平均より低位層の割合は高かった。引き続きエンパワー層を底上げする取り組みが必要。

○●取り組み●○

学力向上に関する取り組み

＊教職員の授業力向上をめざして、研修の充実を図る。

- ・研究授業をおこない、教職員の授業力の向上を図る
- ・各教科、各学年で身につけさせる基礎的な指導の統一やスキルの向上
- ・算数スタンダードの策定（筆算の指導方法など）
- ・モジュール学習の充実
- ・教科専科による専門的な授業展開
- ・タブレットを活用した協働的な学びの推進

＊基礎学力の定着を図るために、教師間の共通認識を図り、取り組みを進める。

- ・チャイム着席の徹底
- ・発言ルール、声のものさしの意識づけ
- ・家庭学習の充実（音読・漢字・計算）
- ・児童が使用する用具、指導用教材の統一、購入、整備
- ・計算問題や用語など既習事項の反復学習
- ・全校一斉の計算学習「のびる子タイム」の活用

＊低学力層の指導

- ・スクールサポーターと交流会を持ち、課題のある児童の実態把握に努め対応を検討する。
- ・スクールサポーターや関われる職員で、4年～6年の少人数指導の充実を図る。

＊スクールサポーターと連携し、学級文庫の充実や読書推進の取り組みを進める。

- ・スクールサポーターの活用
- ・委員会活動の活性化